

2018/03/25

## 「復活までの風景」

### ■患難への備え

「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

(ルカ 22:31-34)

これは、イエス様が、十字架という苦しみを受ける直前に、弟子たちに語られた言葉です。十字架は、弟子たちにとっても、大きな患難です。「サタンが、あなたがたをふるいにかけることを願って聞き届けられた」とは、患難の出どころは、サタンであることを伝えています。よく「神に与えられた試練」などと言われますが、それは誤解です。試練や患難は、神が与えるものではありません。

患難の時、神様は、ただ私たちを助けようとなさいます。この時、私たちは、神様の御手にしがみつくか、この世のものを頼ろうとするかの選択を迫られます。これが試練なのです。聖書で、「試練」、「誘惑」と訳されている多くの場合は、実は同じ言葉が使われています。つまり、試練とは、この世のものを頼ろうとする誘惑のことです。試練とは、神が問題をぶっつけるという意味ではなく、むしろ、問題に対して神が御手を差し伸べているという意味なのです。

イエス様の復活までの風景とは患難です。イエス様は、これから患難が訪れるけれど、あなたがたが信仰を失わないように祈ったからと、まず弟子たちを励まされました。

この時ペテロは、「何があってもイエス様についていく」と豪語しましたが、イエス様は、これから鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないと言うと語りました。

### ■患難には助けがある

「それから、弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは言った。「いいえ。何もありませんでした。」(ルカ 22:35)

この質問は、少し唐突に感じますが、イエス様は、過去を振り返ってみた時、さまざまな

困難があったとしても、常にイエス様があなたを助けてきたことを思い起こさせておられます。

つらいことがあると、そればかりに気を取られて、これまで助けられたことをつい忘れてしまうものです。けれど、神様に愛された事実、罪から救われた事実、これまで助けられた事実、それらが私たちにとって武器になります。イエス様はそのことを忘れないようにさせて、弟子たちに、来たる患難への備えをさせているのです。

## ■今はそれでよい

「そこで言われた。「しかし、今は、財布のある者は財布を持ち、同じく袋を持ち、剣のない者は着物を売って剣を買いなさい。あなたがたに言いますが、『彼は罪人たちの中に数えられた。』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現するのです。わたしにかかわることは実現します。」彼らは言った。「主よ。このとおり、ここに剣が二振りあります。」イエスは彼らに、「それで十分。」と言われた。」(ルカ 22:36-38)

十字架を目前にして、イエス様は、これからは財布と剣を持ちなさいと弟子たちに語られました。財布とは、富を入れる物です。患難への備えとなる富は御言葉です。御言葉を多く蓄えることで、御言葉を思い出す機会が増え、希望を持つことができるようになります。また、剣とは、信仰を表します。これまでイエス様に助けられてきたことを思い出し、私を信頼するようにと、語っておられるのです。

イエス様は、これまでも、自分は殺され、よみがえることを話してこられましたが、弟子たちには理解できませんでした。この時も、弟子たちは意味が理解できず、言葉の表面だけを理解して、実際の財布と剣の意味だと受け取っています。この時イエス様が「それで十分」と言われたのは、「今はそれでいい」という意味です。

私たちも、初めは、御言葉をまず言葉どおりに受け止めるものです。山が動くとか海が割れるとか、祈れば自分にもそのようなことができるのかなと考えて、祈ってみたりします。実際には、神の言葉はもっと奥深い意味があるのですが、すぐにその意味がわからなくても、今はその理解でよいとイエス様は言っておられるのです。

## ■患難の時は祈りなさい

「それからイエスは出て、いつものようにオリーブ山に行かれ、弟子たちも従った。いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい。」と言われた。そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。」(ルカ 22:39-41)

いつも祈る山で、この日、イエス様は、弟子から少し離れて祈りました。それは、患難の時、見えるものにすぐ頼るのではなく、一人で祈ることを教えるためです。

この地上において、人は神をすぐ近くで見ることができません。そのため、患難に襲われると、神はどこにいるのか、なぜ助けてくれないのかと、不安になるものです。この時、神様は、あえて手を出さずに患難を静観し、信仰を訓練なさることがあります。私たちが本当に神様に助けを求めるかどうか、信仰を育てようとしておられるのです。それは、私たちがどんな時も変わらない平安をつかむことができるようになるためです。

そのことが、弟子たちから少し離れたところにおられるというところに現れています。私たちには神様が見えないような気がしますが、神様は、私たちを見捨てているわけでも、遠くにいるわけでもありませんから、祈ればよいのです。

## ■恐れと悲しみ

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」すると、御使いが天からイエスに現われて、イエスを力づけた。イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」（ルカ 22:42-44）

イエス様が激しく苦しみ悶える姿を弟子たちにお見せになったのは、避けられないことは分かっているが、十字架がいかにつらいことかを示すためです。

十字架のつらさとは、肉体の死ではなく、三位一体の神との結びつきを失うことです。死とは神との関わりを失うことです。哲学においても、死とは「関わりを失うこと」と定義されています。木が存在するには水や太陽などとの関わりが必要です。同様に、人の関わりの土台は神です。神との関わりを失うことが死ですから、この世は死の世界なのです。その関わりを取り戻し、死人から生きるものになったのがクリスチャンです。

私たちが、本当に恐れるべきなのは、神との結びつきを失うことだと、イエス様は伝えておられるのです。

「イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに来て見ると、彼らは悲しみの果てに、眠り込んでしまっていた。それで、彼らに言われた。「なぜ、眠っているのか。起きて、誘惑に陥らないように祈っていなさい。」」（ルカ 22:45-46）

弟子たちにとっての悲しみとは、イエス様と離れていることです。私たちにとっての悲しみは、すぐそばにイエス様が見えないことです。そのために、祈ってもうまくいかないと、どうせダメだとあきらめてしまうことはないでしょうか。悲しみの果てに眠り込むとは、問題に対して、あきらめてしまったことを表しています。

しかし、イエス様は、そのような私たちに励ましに来てくださいます。神様は、どのよう

な状況でも、神様を信頼して平安を失わないよう、私たちの信仰を訓練するために、あえて患難を静観なさいますが、私たちが行き詰まる時、再び祈る力が湧いてくるよう、不思議な形で励ましてくださるのです。患難には、誘惑あるいは試練があります。あきらめたり、見えるものに頼ったりする誘惑に陥らないように、試練を乗り越え、神を信頼する側に立ちましょう。

## ■患難

「彼らはイエスを捕え、引いて行って、大祭司の家に連れて来た。ペテロは、遠く離れてついて行った。」(ルカ 22:54)

さて、イエス様が、患難に対する備えとして、神を信頼して祈り続けるように弟子たちを励ました後、ついに患難が始まります。

この時、たとえ牢であろうと死であろうとイエス様について行くと言っていたペテロは、実際には遠く離れてついて行きました。それは、ペテロが人の目を恐れたからです。

いつでも逃げられる態勢で、一定の距離を保ち、キリストにつき従っていく姿に、あなたは自分の姿を感じないでしょうか。日本では、クリスチャンの数が少ないため、自分がクリスチャンだと言えない人が多いとよく聞きます。あなたも、周囲の目を恐れて、周りの人に合わせ、人と同じような行動をとってしまうことはないでしょうか。

「彼らは中庭の真中に火をたいて、みなすわり込んだので、ペテロも中に混じって腰をおろした。」(ルカ 22:55)

この時のペテロは、まさに、周りに溶け込んで、クリスチャンだということがわからない生活をしようとする現代のクリスチャンと同じです。しかし、皆そこからスタートするのです。

ペテロは、神を第一にできず、周りと同じことをしてしまう自分に気づいていました。そんな自分が嫌で仕方がないのに、どうすることもできない、この時、ペテロはたまらなくみじめでした。

## ■主のあわれみ

「すると、女中が、火あかりの中にペテロのすわっているのを見つけ、まじまじと見て言った。「この人も、イエスといっしょにいました。」ところが、ペテロはそれを打ち消して、「いいえ、私はあの人を知りません。」と言った。しばらくして、ほかの男が彼を見て、「あなたも、彼らの仲間だ。」と言った。しかし、ペテロは、「いや、違います。」と

言った。それから一時間ほどたつと、また別の男が、「確かにこの人も彼といっしょだった。この人もガリラヤ人だから。」と言い張った。しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません。」と言った。それといっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。」(ルカ 22:56-60)

ここで、患難の中で本当にイエス様を頼ることができるかどうか、ペテロの信仰が試される出来事が起こります。この試練に対して、ペテロは、主を「知らない」と答えてしまいます。たまらないみじめさに罪責感が増し加わり、ペテロの心の中は、ズタズタになりました。

実は、イエス様は、弟子たちとの食事の前に、一つのたとえ話をしておられます。それは、取税人とパリサイ人のたとえです。

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人のほうが、前の人よりも、義と認められ、家に帰って行きました。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

(ルカ 18:13-14)

「こんな罪人の私をあわれんでください！」……この祈りを叫ぶ人が、神の愛を受け取ることができ、平安を得て帰ったのだと、イエス様は言われました。イエス様が十字架に架かる前に、このことを話されたのには意味があります。ペテロの魂は、「私をあわれんでください」と叫ぶしかない状況に追い込まれていたからです。

「主が振り向いてペテロを見つめられた。」(ルカ 22:61)

イエス様は、ペテロの魂の叫びを聞き、彼を見つめました。その瞳は、「それでも、私はお前を愛している」と語っていました。

もし、あなたが一番つらい時、どうにもならない自分の罪に気づいて叫んだ時、イエス様の微笑みを見ることができたら、何を感じるでしょうか。それは愛です。私たちは、イエス様のまなざしから、私の罪は赦されたという愛を受け取るのです。

ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。」と言われた主のことばを思い出しました。そして、イエスの表情を見て、その罪が赦され、義とされたことを悟ったのです。ペテロは確かに罪を犯しましたが、それと同時に罪が赦されていることを思い出したのです。

「彼は、外に出て、激しく泣いた。」(ルカ 22:62)

これは、罪が赦された喜びを表す感動の涙です。

もし、イエス様がペテロを責め、悲しみの目で見つめたのだとすれば、ペテロは自分のし

たことを後悔して、どうしようもない自分を責めて泣いたことでしょうか。それでは、彼は患難に押しつぶされてしまいます。しかし、イエス様が十字架に架かる直前に、取税人の話をしたことで、そうではないことがわかります。ペテロの魂は、神に助けを求めざるを得ない状況に追い込まれ、赦されて義とされ、平安に至るのです。

## ■なぜイエス様の苦しみが必要だったか

イエス・キリストは、この後、裁判、ムチ打ち、あざけり、暴力などの迫害に遭います。なぜこのような苦しみが必要だったのでしょうか。それには、3つの理由があります。

### 1. あわれむため

私たちが受ける苦しみを味わうことで、イエス様は私たちの苦しみを理解して受け入れてくださる方であり、私たちをあわれむ方であることを示しておられます。

### 2. 苦しみを背負うため

イエス様は、私たちの罪を背負って十字架に架かられたことを、私たちに伝えるために、苦しみを受けられたのです。

### 3. イエス様とあなたが引き離されることはない

人間の弱さや罪深さを見ると、神様に愛想を尽かされてしまうのではないかと感じてしまうこともあります。しかし、イエス様は、どんな苦しみを受けてもなお、この愛は変わることはないことを示しておられます。

「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」

(ルカ 23:34)

どんなものも、イエス・キリストにある神の愛から、私たちを引き離すことはできないと、聖書は語ります。イエス様は、何をしてもあなたを嫌わないし、見捨てないということを示して、十字架につけられ、殺されました。そして、イエス様は復活するのです。

十字架は、どんなにあなたが神につまずこうと、迫害しようとして、私はあなたを見捨てないというイエス様のメッセージです。あなたは、この神様に捕らえられているのです。安心して主についていきましょう。